Let's Know Hiroshima Castle.

しろうや！広島城

No.32

戦前の広島城天守（広島城蔵）

東国の一武将は見た！ 毛利氏時代の広島城天守

はじめに

広島城は毛利輝元によって天正17年（1589）から築城が始められ、同19年（1591）４月に輝元が入城、この頃から毛利氏の新たな政庁として機能し始めます。この段階で広島城がどこまで完成していたのかは不明ですが、城と城下町の整備は、毛利氏が防長二ヶ国に減封される慶長5年（1600）まで続けられたと考えられています。

天守は毛利氏時代に創建されたとするのが、建築学分野での共通した見解です。しかし、この時期の毛利氏の古文書には、創建時期どころか天守の存在を直接示す記述すら見られません。江戸時代に編纂された記録類には、天守の創建時期を直接あるいは間接的に示したものもありますが、記録によって時期が異なっています（主な近世記録の記述については表１参照）。

そのような状況のなか、平塚山城守瀧俊（やましろのかみたきとし）なる武将が天正20年（1592）５月に認（したた）めた書状に、広島城の天守の記述があることがわかりました。

平塚瀧俊とは？

平塚瀧俊は常陸（ひたち）水戸（茨城県水戸市）を本拠とする有力大名、佐竹義宣（よしのぶ）の家臣です。出身地や生没年は不明ですが、佐竹氏家臣団においては中級あるいはそれ以上の武士だったと考えられています。

東国の一武将、平塚瀧俊の書状に広島城の記述があるのは、彼が広島を訪れたからに他なりません。天正20年１月、豊臣秀吉が朝鮮出兵（文禄の役。壬辰倭乱）を指令したことにより、諸大名の軍勢が肥前名護屋（ひぜんなごや）（佐賀県唐津市鎮西町）へと集結します。平塚は佐竹軍の一員として動員され、名護屋に向かう途中、広島を通過したのです。

天守創建に関する記述	原文	資料名	成立年代
かつて毛利輝元がこの地の海を埋めて城を築き、五重の天守を築きました。	曾毛利輝元是地利埋海以築城中架五重之楼　倭俗号天守	『芸州志料』	寛文元年（1663）
文禄元～２年（1592～93）に城を普請し、石垣・天守は完成しましたが、櫓は未完成でした。	文禄元年より同二年迄御城御普請石垣殿守ハ成就しけれども櫓ハいまた調ハす	『広島独案内』	享保頃か（1716～36）
文禄元～２年（1592～93）に城を普請し、天守が完成しました。	文禄元年より同二年に至り城普請殿守なれり	『西備名区』	文化元年（1804）
文禄元年（1592）から作事を始め、慶長４年（1599）までに普請と作事が終わりました。	文禄元年より御作事始、慶長四年まて普請作事成就なり	『知新集』	文政5年（1822）
慶長４年（1599）に城が落成しました。天守や櫓等の多くは毛利氏時代に完成しましたが、曲輪の城壁等は福島氏の時にようやく整備されました。	慶長四年に落成す、又云城楼などは多く毛利氏の時に成けれど、郭の堵墻などは、福島氏の時に至りて、漸く備りたりと、	『芸藩通志』	文政8年（1825）

表１　江戸時代の記録に見られる天守の創建年代　　広島市教育委員会編『史跡広島城跡資料集成第１巻』1989 より作成

書状の詳細

平塚瀧俊書状の原本は所在不明ですが、後世に作られた写（うつし）が複数伝わっています。そのうち、「名護屋陣ヨリ書翰（しょかん）」（東京大学史料編纂所蔵謄写本）という写が、最も原本に近いと考えられています。それによると、書状は肥前名護屋の陣中から国元の留守を預かる小野田備前守（びぜんのかみ）なる人物に宛てられたもので、日付は 5月1日となっています。

内容は、①名護屋陣中での近況報告、②京都・名護屋間の道中における体験記・見聞記で、広島城に関する記述は②に含まれています。②については、「帰国した際のみやげ話としたいが、朝鮮半島への出陣がせまり、生きて帰れる保証もないため、書状で伝えることにした」と記しており、書状を作成した目的の一端がうかがえます。

なお、書状には広島城以外にも、姫路城、岡山城、備中高松城、三原城、門司城、小倉城、名島城に関する記述がありますが、天守の記述があるのは、広島城と名島城だけです。

では、書状の冒頭部分を掲げ、まずは平塚ら佐竹軍の足取りをたどってみましょう。

さてさてそれ以来は国本の消息是非承（もと）らず、心（こころ）元なく存じ候（そうろう）、さてまた此方（こなた）の様子も具（つぶさ）に聞き得（え）申しまじく候、三月十七日に京都を御立ちなられ候、かかる不思議なる御世上に生まれ合い、よき時分御供仕り、ここ元（肥前名護屋）迄見物申す事、安（案）の外に御座候（ござそうろう）、路次（ろじ）中何事なく、卯月二十二日に当国へ御着なられ候、

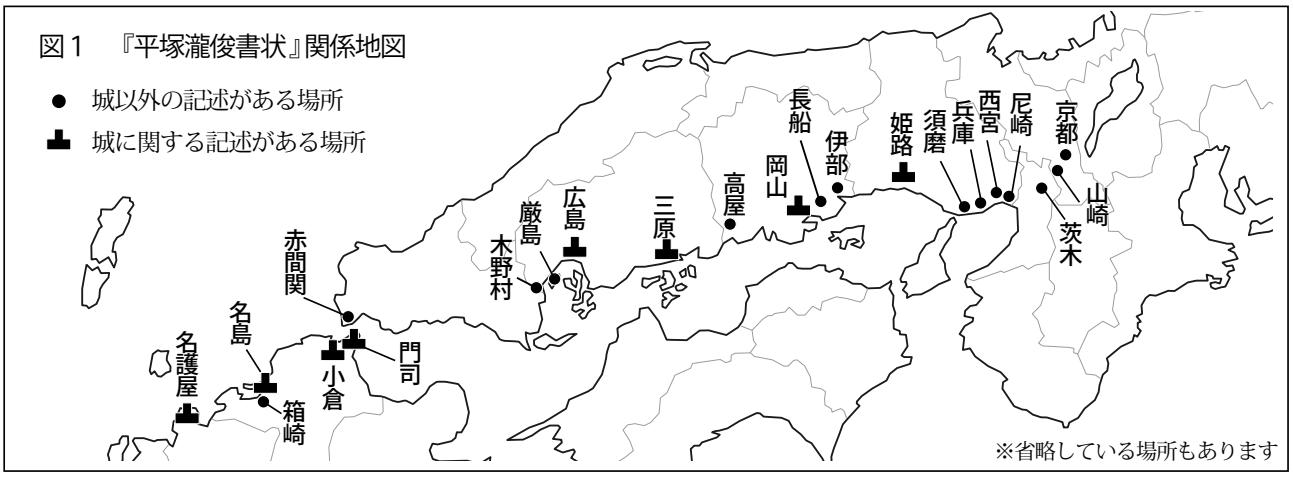
平塚ら佐竹軍は 3月17日に京都を出発、陸路山陽道を西へと進み、4月22日に名護屋に到着しています（途中の主な経由地については図1参照）。広島到着の時期は記されていませんが、佐竹軍と同様に３月17日に京都を発った伊達政宗軍が４月9日に周防（すおう）花岡（山口県下松市）に到着していることを考慮すると、4月上旬頃と考えられます。

続いて、広島城に関する部分を掲げ、内容を整理・検討してみましょう。

ひろ嶋と申所にも城御座候（ござそうろう）、森（毛利）殿の御在城にて候、①これも五・三年の新地に候由申し候（そうら）えども、②更に更に見事なる地にて候、③城中の普請等は聚楽（じゅらく）にも劣らさる由申し候、④石垣・天守等見事なる事申すに及ばず候、⑤町中はいまた半途（はんと）にて候、

（以上、「名護屋陣ヨリ書翰」より）

①広島という所にも城があります。毛利輝元殿の居城です。
②ここ数年で築かれた新たな城ですが、さらに見事な城です。
③城内の普請は聚楽第にも劣らないそうです。
④石垣や天守等が見事であることは言うまでもありません。
⑤城下町はまだ建設途中です。



③はその書きぶりから人から伝え聞いた話かもしれませんが、②④⑤は平塚自身が実際に見て観察した光景を表現していると考えられます。

これらのことから、天正20年４月上旬段階における広島城の天守は、「見事であることは言うまでもない！」と平塚が記すに値する状況であり、外観については完成していたか、それに近かい状況だったと解釈することは可能でしょう。

秀吉も登った!?　広島城天守

ところで、平塚瀧俊の広島通過とほぼ同時期、天正20年4月11日には、名護屋下向途中の豊臣秀吉が広島城を来訪しています。当時、毛利輝元は留守でしたが、城の留守を預かる毛利氏家臣が秀吉の様子を文書で輝元に報告しており、そこには本丸内での行動が次のように記されています。

> 御殿（ごてん）へ御あがり、内外共にことごとく御覧候（ごらんそうらい）て、御感斜（ぎょかんななめ）ならず候（そうろう）、
>
> （「安国寺恵瓊外二名起請文」毛利家文書1041号より）

「秀吉様は本丸の『御殿』におあがりになり『内外』全てをご覧になられた、感心されること、ひととおりの様子ではなかった」というのが、大まかな意味です。

実はこの一節、毛利氏時代の広島城の天守を考える上で大きな鍵になるとして、古くから注目されてきました。秀吉が見た「内外」を城の内外とすると、「御殿」とはそれを見渡すことの出来る天守を指すことになる、というのがその理由であり、この見解を根拠に、天正20年４月には天守が完成していたとする説が示されています。その一方で、天守を「御殿」と表現するとは考えがたく、「御殿」は文字どおり本丸御殿を指しており、当時天守は未完成だったとの反論も示されています。

しかし、「平塚瀧俊書状」からは、秀吉の訪問時、天守の外観は完成していたか、それに近い状況だったと考えられます。この考えにもとづき、再び先の一節を読み直すと、どうなるでしょうか？

すると、「御殿」を天守と、「内外」を城の内外と見なすことに抵抗はなくなります。最大の問題である、「天守」という文言が見られない点については、本来「御殿主」と書くべきところ、「主」を書き忘れて「御殿」と書いた可能性が高いと考えられます。この時代、天守を「殿主」と書いた例は他にもありますし、当時の文章表現では音を重視して当て字を使うことが多く、「天守」という文言に縛られなくてもよいと考えられます。

したがって、天正20年4月11日、秀吉は広島城の天守に登ったと考えられます。

さいごに

「平塚瀧俊書状」は、広島城の天守について記された初出史料であり、これにより天守の完成時期上限を絞り込むことが可能となりました。ただし、これは文献上の絞り込みであり、今後は他の分野での成果を加えた相互検証が必要であることは言うまでもありません。

この書状は、広島城以外にも三原城や厳島等の記述があり、毛利氏時代の広島県地方を考える上で非常に貴重な史料と言えます。関係する部分を紹介し、終わりにしたいと思います。

〔翻刻〕

それ(より)(三)大原と申城、是ハ小早川(隆景)在所ニ候、三四年の新城なる由申候、いり(入)海のきわにて候、ひろ嶋と申所にも城御座候、森(毛利輝元)殿の御在城にて候、是も五三年の新地ニ候由申候得共、更に〻見事成地ニて候、城中のふしん(普請等)なと(聚楽)ハしゆらくにもおとらさる(劣らざる由)よし申候、石かき(垣)天しゆ(守)なと見事成事不及申候、町中ハはいまたはん(未だ)と(半途)にて候、それ(近辺)ハいつく嶋きんへんに御在陣に候間、見物として罷越候、かいしやう(海上)上道二里ほと御座候、是又見事成儀ハ言語ニのへられす(述べられず)候、塩さし候時ハとりいの(鳥居)はしら(柱)三尺かくれ候由申候、くいわいらう(回廊)のしたにも入海ニ成候由申候、かねてこれほとたるへ(べ)きとハゆめ〻不存候、大政(平清盛)入道殿御子孫女子にて今に御座候由申候、神主その物語にて候、但偽ニ候や不存候、入道殿御いり(ママ)候いしかき(石垣)いまに御座候由申候、扨又大(太)閤様近年きやうだう(経堂)かを御立被成候、是又見事是非不被申候、はしらハ過半くす(楠)の木にて候間、おひたゝしき(夥しき)ニおよひ(匂い脱カ)申候、今迄見物申候内に、是ほと見事成事無之候、町中ハかた〻かけつくり(懸け造り)ニ候儘、すかき(簀垣カ)のしたへ直ニふね(舟)を付候、町中の様子京におとり候ハんやうす(ママ)(様子)にて候、左候間、珍物はてもなく候、六(亦カ)名酒なと沢山ニ候間、しうしつゆさん(終日遊山)申候、扨又こやのと申候村ニ川なかれ(流れ)候、すわう(周防)のさかい(境)ニ候、

（「名護屋陣ヨリ書翰」より）

〔意訳〕

それから三原という城がありました。これは小早川隆景の城です。ここ数年で築かれた新城とのことです。入り江沿いに築かれています。広島という所にも城があります。毛利輝元殿の居城です。これもここ数年で築かれた新城とのことですが、さらにさらに見事な城です。城中の普請などは聚楽第(じゅらくだい)にも劣らないそうです。石垣・天守などが見事であることは申すに及びません。城下町はいまだ建設途中です。それから厳島の近くに佐竹義宣公が陣を張ったので、見物のため厳島へ渡りました。海上二里ほどの距離です。厳島が見事であることは、これまた言葉に言い尽くせません。潮が満ちると、厳島神社の鳥居の柱は海水に三尺ほど浸かります。回廊の下にも潮が満ちてくるそうです。厳島がこれほどまで素晴らしい場所とは、全く予想もしませんでした。平清盛殿の御子孫の女性が今もいるそうです。神主はそのように話しました。ただし、真偽(しんぎ)は不明です。平清盛殿が「御いり」された石垣が今もあるそうです。さて、太閤様が近年経堂（千畳閣）をお建てになられました。これまた見事です。柱の大半は楠なので、ものすごく匂いがします。今まで見物してきた中で、これほど見事なものはありません。厳島の町屋は、あちこちが懸(か)け造り（建物が海に突き出た構造）になっているので、「すかき」（簀垣(すがき)か）の下に直接舟を着けることができます。町中の様子は、京都の町にも劣りません。そのため、珍しい物は尽きず、また銘酒などがたくさんあり、一日中遊びました。さて、また、「こやの」という村（木野(この)村か）に川があります。周防との境です。

〔参考文献〕

秋山伸隆「広島城の四〇〇年　一. 毛利時代の広島城」広島市（広島市公文書館）編『図説広島市史』1989

岩沢愿彦「肥前名護屋城図屏風について」『日本歴史』260号, 1970

佐賀県文化財調査報告書第81集『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡3「文禄・慶長の役城跡図集」』佐賀県教育委員会 ,1985

鈴木理恵「近世旅人のみた広島」（2011年度芸備地方史研究会歴史講座「広島県の歴史」配布資料）2012

広島市教育委員会編『史跡広島城跡資料集成第１巻』1989

福田千鶴「伊達政宗の居所と行動」藤井譲治編『織豊期主要人物居所集成』思文閣出版, 2011

三浦正幸「二基の小天守を従えた天守」『歴史群像名城シリーズ 9 広島城』学習研究社, 1995

※「名護屋陣ヨリ書翰」の全文は、岩沢氏論文、または佐賀県文化財調査報告書に掲載されています。なお、平塚瀧俊の書状については、鈴木理恵氏の資料によって、その存在を知りました（ただし、引用されているのは「中外経緯伝草稿」所収の別系統の写）。

（篠原達也）

しろうや！広島城

編集・発行

財団法人広島市未来都市創造財団
広島城

〒730-0011
広島市中区基町 21-1
電　話：082－221－7512
ＦＡＸ：082－221－7519

平成24年8月 4 日発行

広島城利用案内

開館時間：9：00 ～ 18：00
（12 月～２月の平日は 9：00 ～ 17：00）
入館の受付は閉館の30分前まで
入 館 料：大人360 円（280 円）
小人180 円（100 円）
（　）内は30名以上の団体料金
休 館 日：12月29日～１月２日
ホームページ　http://www.rijo-castle.jp

携帯サイト

「しろうや！広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます